



漱石と  
広島

### 尼子四郎



昭和初期、広島県医学校同窓会での  
尼子四郎＝中央  
(広島大医学部医学資料館所蔵)

森鷗外 1862～1922年。島根県津和野町の生まれ。小説家、評論家、軍医。ドイツに留学して医学を学び、文学や美術に親しんだ。帰国後、職務の傍ら小説や評論などを発表。軍医としては最高位の陸軍軍医総監になった。作品に「舞姫」「阿部一族」「高千穂木町時代の漱石の家」(松本洋二さん所蔵「漱石写真帖」から)

クリック

瀬丹「山椒大夫」「渋江抽斎」などがあり、夏目漱石と並び称される。  
尼子富士郎 1893～1972年。下松市の生まれ。浴風園病院長などを務めながら老年医学の先駆的な研究を行った。一方で父・四郎が創刊した「医学中央雑誌」を継承した。

千駄木時代の夏目家と尼子医院(秦郁彦「漱石文学のモデルたち」から)

録。1日に約1万5千人が利用しているという。  
戸河内小に尽くす  
尼子の生涯は苦難に満ちていた。1865(慶応元)年、広島県安芸太田町(当時は戸河内村)の庄屋鉄三郎、喜和の次男として生まれたが、母は出産直後に亡くなり、明治維新の際には家が没落。育てられた叔母の家も窮乏し、寺の門前で菓子売ったこともあったという。一度は医師になることを断念したが、県費で医学生を養成していた広島県立医学学校(広島県立医学専門学校の前身校)に入学。首席で卒業し、医師への道を歩んだ。

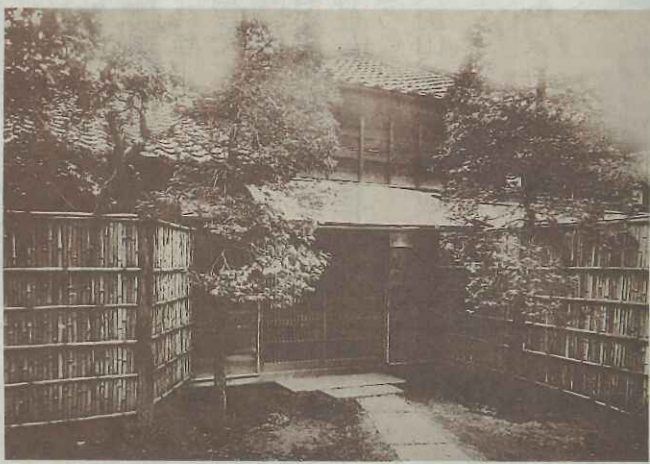
夏目漱石は、作品の登場人物のモデルについてほとんど明らかにしていない。「坊っちゃん」に登場する山嵐は、松山時代の同僚教師、渡部政和を思わせるが、と聞かれた際も「僕は渡部先生のことにはよく知らない」と逃げていた(近藤英雄「坊っちゃん秘話」)。その漱石がモデルをはっきりと明かしたのが、「吾輩は猫である」に出てくる医師甘木先生である。

1906(明治39)年、漱石は広島市にいた鈴木三重吉に手紙を送り、僕の友人には広島出身者が何人かいて、「甘木先生も廣島の人だ」と書いている。作品の中の甘木は、主人公の猫が飼われている珍野家のかかりつけ医師。一方、夏目家の家庭医は広島出身の尼子四郎だったのである。

作品の中では、珍野家の主人、苦沙彌が甘木に往診してもらっている。身近な存在として描かれている。苦沙彌が催眠術による治療ができるかと尋ねたところ、甘木は「あなたさへ善ければ懸けて見ませう」と引き受けたものの、ついにはかからなかった場面もある。



戸河内小校門に立つ尼子四郎寄贈の門柱と説明板。見ているのは京極さん



# 「猫」に登場する家庭医

## 100歳先で医院開業

漱石は英国留学から帰った1903(明治36)年、東京・駒込千駄木町57番地(現在の東京都文京区)の家に引っ越し、3年半住ん

だ。この家は森鷗外も住んだことがあり、今は博物館明治村(愛知県犬山市)に保存されている。そこから100歳先の50番地に開業していたのが尼子四郎である。漱石の家には「吾輩に遊びに行っていたとも尼子は回想してい

る。さらに尼子は、漱石に長男富士郎の英語の個人教授も頼んだ。富士郎が目指す中学の入学試験に英語があったからだ。後年、富士郎は「漱石が父、四郎に『出来が悪く』と言ったので、大変弱りました

と。この家は森鷗外も住んだことがあり、今は博物館明治村(愛知県犬山市)に保存されている。そこから100歳先の50番地に開業していたのが尼子四郎である。漱石の家には「吾輩に遊びに行っていたとも尼子は回想している。さらに尼子は、漱石に長男富士郎の英語の個人教授も頼んだ。富士郎が目指す中学の入学試験に英語があったからだ。後年、富士郎は「漱石が父、四郎に『出来が悪く』と言ったので、大変弱りました



た」と述べたという(斎藤晴恵「尼子四郎と夏目漱石」『医学図書館』53巻1号)。だが富士郎は東京帝大医科大(現東京大医学部)に進み、日本の老年医学の父といわれるまでになった。

尼子自身も、のんきなイメージとは違い、旧広島藩主浅野家などの医師も務め、多くの業績を残した。特に1903年、個人で創刊した「医学中央雑誌」は医学関係の専門誌の記事の索引と抄録を掲載。医師や看護師、論文を執筆する研究者などになくてはならない存在となった。母子がインターネット上のウェブに変わった現在、年間に約3千誌から35万件超を採

「吾輩は猫である」に書かれた時には「飛んだ所へ引合に出された」と漱石に言ったという。作品からは気さくで温厚な人柄がうかがえる。だが、尼子が唱えていたという短歌には苦難を乗り越えてきた気概がこもる。「うきことの上ほこの上に積もれかし限ある身の力ためさん」(富士川游「故寿山尼子四郎君」)  
(客員編集委員・富沢佐一)  
第1、3十曜日に掲載します。次回は20日です。